

主として魚類であると推察された。

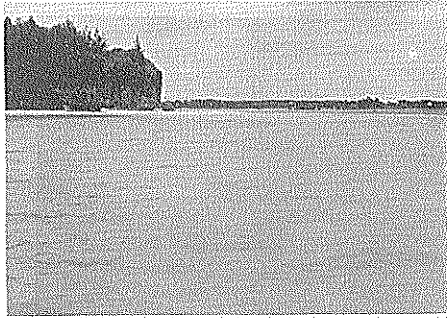
また食害防止の一方法として三枚底刺網はサンゴ性藻の多い漁場では使用できないことが明らかになった。

以上のことから、残された問題点と解決方針を記した。

参 考 文 献

- 1) 沖縄県水産試験場,(1975): 珊瑚礁内海域における増養殖漁場開発の研究(1972～1974)
- 2) 津嘉山正光,(1968-70): 沖縄本島海岸の実態調査(第1報～第3報)
- 3) ウイラード・バスカム著 吉田・内尾訳,(1975): 海洋の科学・海面と海岸の力学
- 4) 中村 充・佐々木・新島・根間,(1969): 沖縄の干拓における海岸工学的研究
- 5) 谷口森俊,(1971): 沖縄島の海藻群落、医学と生物学82, PP13～17.
- 6) 幡手格一上城義信・小川和敏・国武和人,(1974): アマモの増殖に関する研究-I
- 7) 幡手格一上城義信・小川和敏・国武和人,(1975): アマモの増殖に関する研究-II
- 8) 高田英夫,(1974): 塩と生物
- 9) 千田哲資,(1969): 藻場の造成
- 10) 鹿児島県水産試験場,(1975): アワビ増殖技術研究報告書
- 11) 河本良彦・富山昭,(1968): ホンダワラ類の増殖に関する研究 I
- 12) 岡村金太郎,(1951～1952): 日本海藻図譜 I～VII
- 13) 岡村金太郎,(1956): 日本海藻誌
- 14) 新崎盛敏,(1964): 原色日本海藻検索図鑑
- 15) 瀬川宗吉・香村真徳,(1960): 琉球列島海藻目録
- 16) 瀬川宗吉・香村真徳,(1966): 原色日本海藻図鑑
- 17) 大城 肇,(1964): 沖縄諸島の海藻
- 18) 千原光雄,(1970): 海草の生態
- 19) 東北区水産研究所,(1974): 浅海域における増養殖漁場の開発に関する総合研究
- 20) 山田幸男,(1942): 南日本産ほんだわら属の種類に就て其一、其二、其三
- 21) 琉球政府気象庁,(1971): 沖縄産業気象報告第5号

図版 I 漂砂とアジモ場



① st.14 附近の冬期のバーム  
海底は全面白い砂で覆われている  
(1976-1-14)



② st.23 - st.24 附近  
漂砂による藻場の分断 (1975-8)



③ st.28 - st.29 附近の漂砂 (矢印の部分)  
(1976-2-15)



④ st.11 附近に堆積した砂  
(1976-1-14)



⑤ st.16 附近 堆積した砂から出芽したベニ  
アマモ (1975-5)

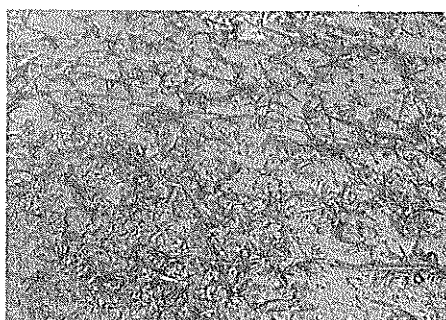


⑥ st.17 附近 砂が除かれアジモとカイメン  
ソウが混生した状態 (1975-9)

図版 II 漂砂とアジモ（続き）と施肥試験



① st. 8 附近 堆積した砂が除かれた直後のアジモ



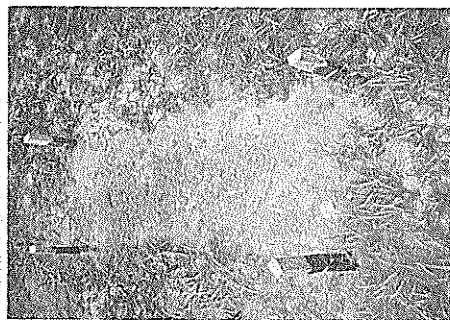
② st. 3 附近 地下茎が露出したアジモ



③ アジモ場の中の I B 施肥区,  $1\text{ m} \times 0.5\text{ m}$   
× 4 面 屋嘉田湯原



④ 鶏糞肥料を入れた周囲のアジモの生育状態



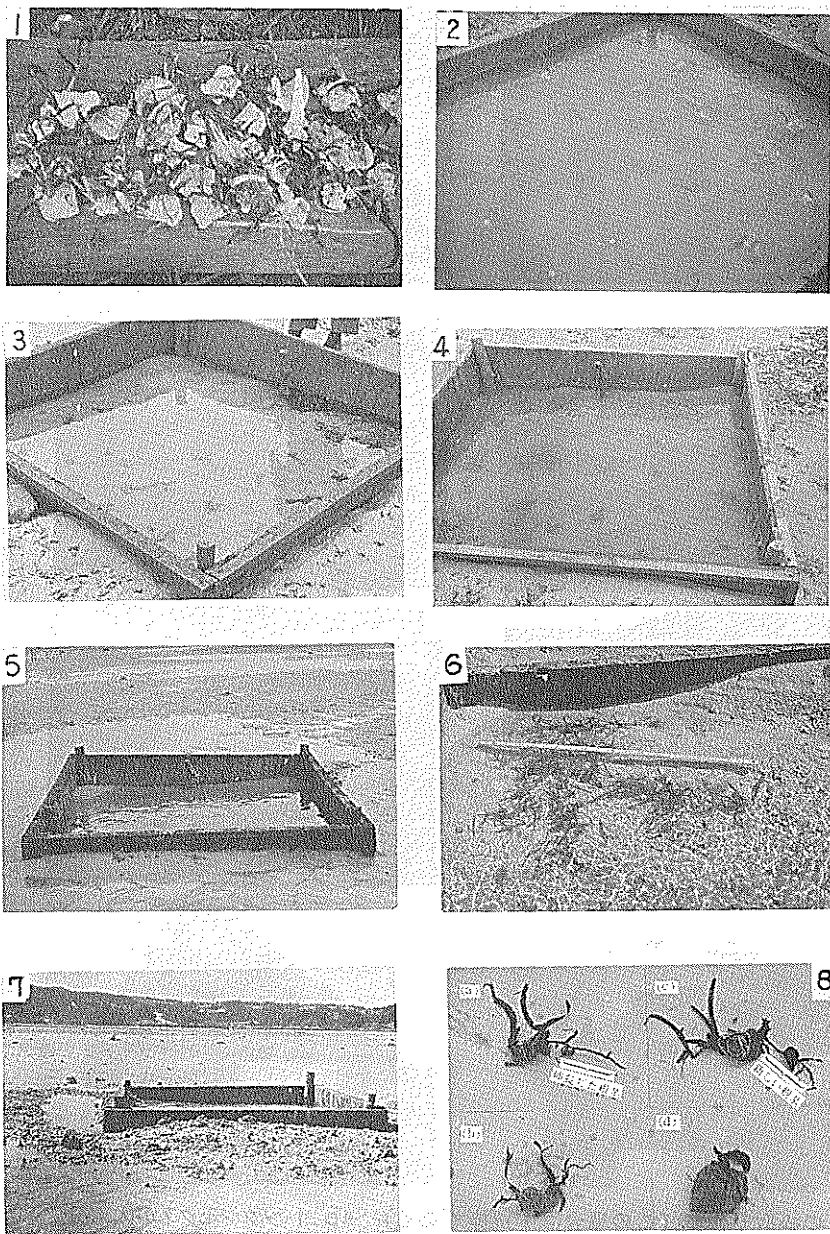
⑤ 施肥後1ヶ月目（7月） 施肥区 No.2



⑥ 施肥後4ヶ月目（10月） 施肥区同左  
根茎の最大伸長  $50 + \alpha\text{ cm}$

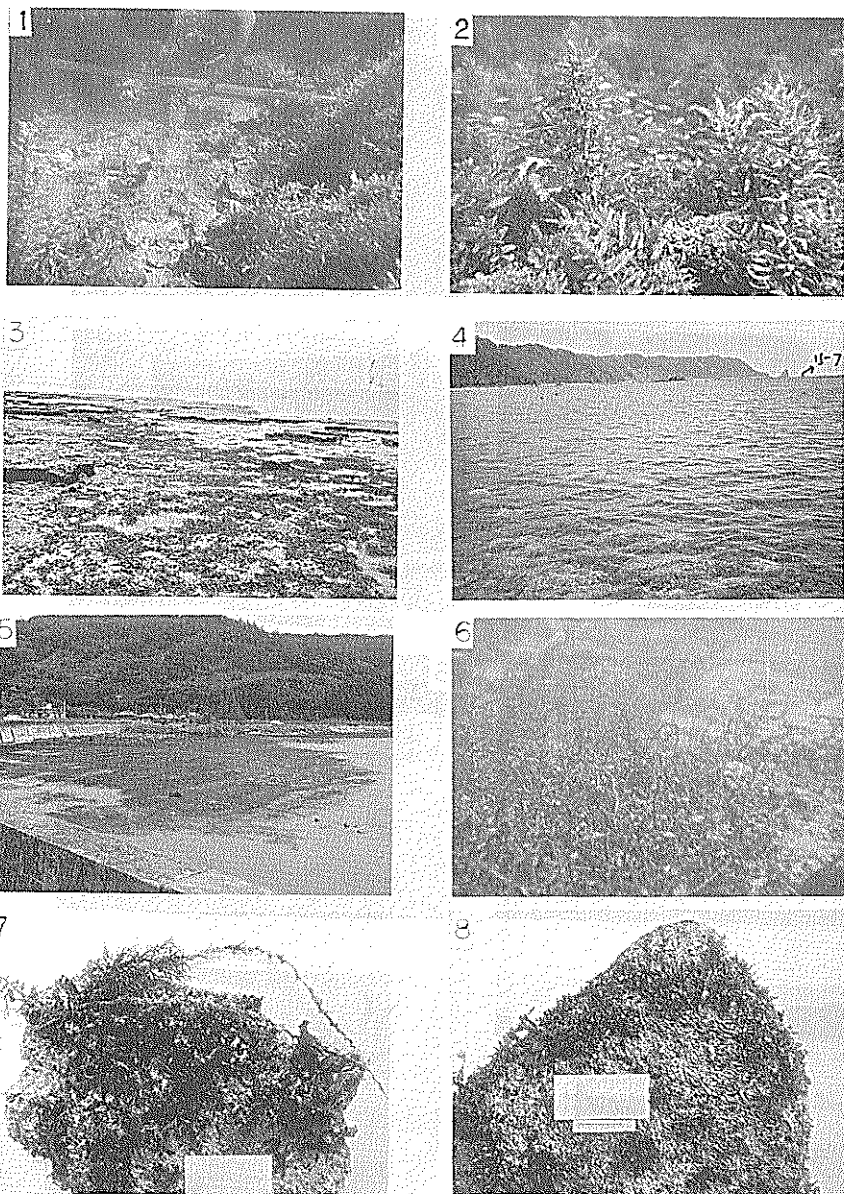
図版Ⅲ 堀削試験池におけるアジモ（リュキウスガモ・ベニアマモ）の移植後の経過

池内砂礫の攪乱による根の伸長と根の腐敗



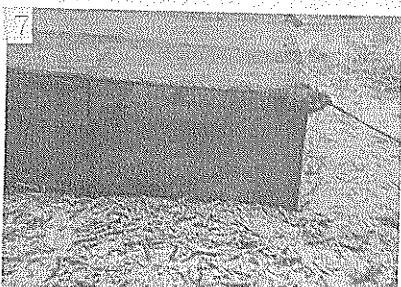
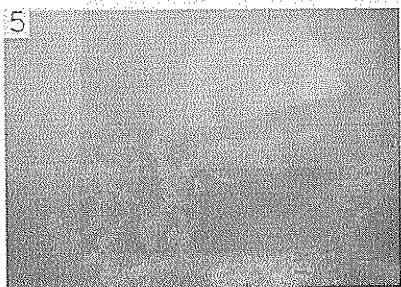
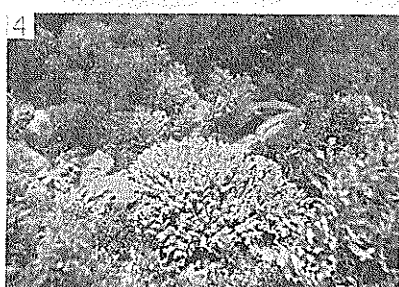
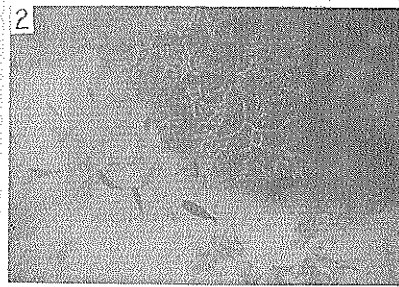
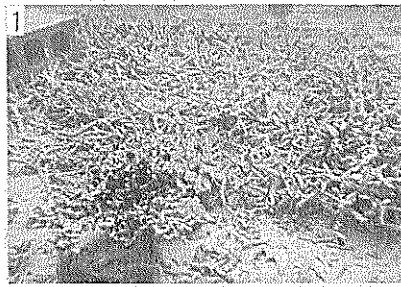
- ① こぶじ大の碟に結着した移植用の株
- ② 堀削池（ $1.8 \times 1.8 \text{ m}^2$ ）における移植株の配置と植えつけ 50年6月12日。
- ③ 2号池 20株だけ残る 50年7月8日。
- ④ 同じ池 10株だけ残る 50年8月18日。
- ⑤ 同じ池 51年2月7日 移植株すべてなくなる。
- ⑥ 1号池の51年2月7日の状態、50年6月12日の移植草はすべてなくなり、49年7月11日移植のうちスコップ一把分だけ残っていて、50年2月14日の時点で最長のものが根茎50cmの伸長が認められる。
- ⑦ 51年2月7日、6号池 池内外の砂礫の攪乱の跡が著しい。
- ⑧ 51年2月7日、5号池に生残していた芝植えの移植株（a.b.c）と碟と紐だけ残っているもの（d）

図版Ⅳ ホンダワラの生態調査



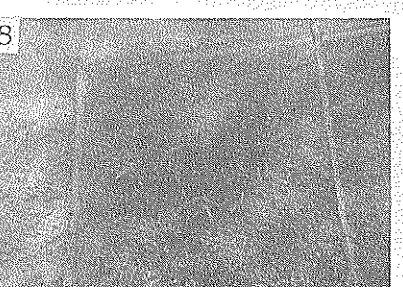
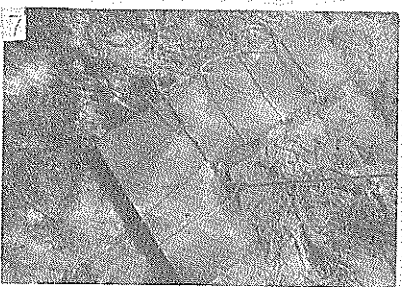
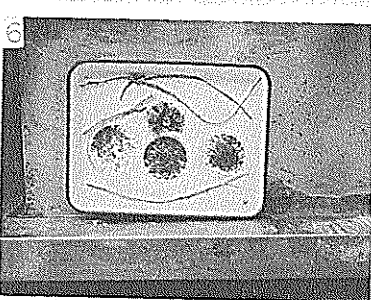
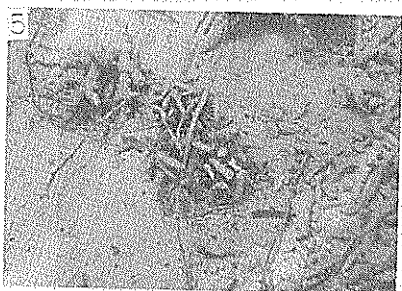
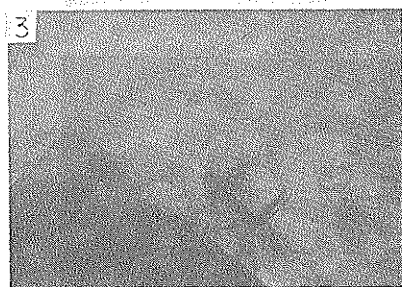
- ① ホンダワラの枠取り作業（この場合は1㎡枠である） sp.1 ツクシモク?が大部分。
- ② 藻場のアイゴ (*Siganus spinus*) の幼魚の群れ 50年7月22日 大久保。
- ③ 読谷村残波岬南側のタイドプールの中のフタエモク、ヤバネモク、不明種 3種の混生群落、50年9月4日、フタエモクは根茎部を残すのみ。
- ④ 名護市宇嘉陽地先のホンダワラ藻場の一部、リーフの近くから陸側を眺める、50年6月11日
- ⑤ 台風の接近通過後湾奥部に漂着した流れ藻。50年9月6日、名護市宇二見。
- ⑥ 与那城村字伊計地先の藻場、50年10月17日、ほとんどsp.1 (ツクシモク?) すでに根茎を残すのみ。
- ⑦ 宜野座村大久保地先。カラクサモクのほとんどは枝葉部がなくなり、座とその古葉のみ残る。ツクシモク? の幼芽がみられる。51年1月28日。
- ⑧ リーフ上のsp. 4 ナンカイモク?の座からの幼芽、葉長1~2cm、名護市宇嘉陽、51年1月28日。

図版 V 採苗試験漁場と採苗の経過



- ① 移植採苗漁場（恩納村屋嘉田地先）に散在するエダサンゴの礫
- ② 同上漁場に点在するエダサンゴのへい死愧とニザダイの一種
- ③④ 宜野座村字大久保地先の藻場。採苗のため基質を設置した場所。サンゴはほとんど生きていて、サンゴ性の岩礁が多い。50年7月22日
- ⑤ 昭和50年10月2日、母深の移植直後の状態。恩納村字屋嘉田の浅場
- ⑥ 昭和50年11月20日、基質の上面に多数の幼芽が認められる。
- ⑦ 浅場に設置したネットロン網（Z6）防止網の昭和50年11月20日の状態、目づまりは少ない。
- ⑧ 同上の場所、日時における、モジ網防止網の状態。目づまりが大きい。

図版 VI 食害調査



- ① 食害調査のための移植藻 ツクシモク？  
左は4mm目のモジ網をほどこした食害防止網1.8×1.0×0.6m<sup>2</sup> 50年8月26日
- ② 同上の目的のヤバネモク
- ③ 移植後8日、網の外のブロック、ツクシモク？は茎だけ残る。
- ④ 藻場から自然の基質ごと移植したのも同様である。シラヒゲウニが一個体ついている。
- ⑤ 移植藻ツクシモクの茎は基質から離れ、辺りに散在している。9月3日（移植8日後）
- ⑥ ⑤にみられるウニの消化管内容物、ホンダワラの細片で充たされる。
- ⑦ 8日後の一部の基質の状態。
- ⑧ 同じく8日後の防止網の中、一部網の中で浮いているものもあるが、葉が脱落してなく、大部分は基質についている。